

# 中国陝西省北部農村の人間関係形成機構

——〈相夥〉と〈雇〉——

深 尾 葉 子  
安 富 歩

## 第1節 はじめに

周知のごとく中国では一般に金銭についての詮索や噂話はタブーではない。初対面の人に給料を尋ねたり、持ち物の値段を訊いたりするのは非礼ではなく、むしろ相手に対する積極的な興味を示す話題とされる。これは我々がフィールドワークを行っている陝北の農村（陝西省榆林市米脂県楊家溝郷楊家溝村）でも同じことであり、調査者もまたこの種の飽くなき詮索に晒されている。

その対象は当然のことながら外來の調査者に限られるものではない。特にほかの村人が家屋建築などの労働に従事した際に受け取った仕事の謝礼の内容について強い関心を持ち、その内容について頻繁に情報交換を行なっている。その種の噂話の対象となる「謝礼の内容」は実に詳細であり、謝礼として支払われた金額に留まらず、その時に出された食事の内容、休憩時に提供されたタバコの銘柄にまで及ぶ。

ところがこれほど細かい議論が熱心に行われている一方で、筆者のひとり（深尾）はこの地域におけるフィールドワークのなかで一つの不思議な現象に繰り返し出逢って来た。それはある一つの仕事、たとえば〈窑洞 yáodòng〉<sup>(1)</sup>（写真参照）の建設や儀礼の際に、報酬を受けて働く人と、無報酬で働く人が互いに矛盾をきたすことなく混在しているという点である。村人が労働の対価

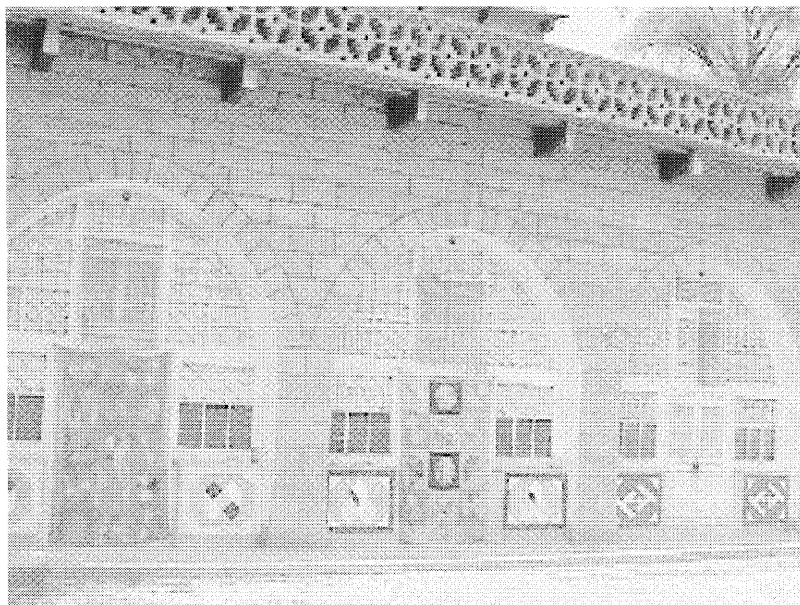


写真 陝西省北部における最近の<窯洞>の例

の水準についてきわめて敏感である一方で、具体的な仕事の場面で支払われる謝礼の金額がさまざまであり、無償奉仕まで含まれているという一見矛盾する事実はどのように理解することができるであろうか。この謎が本稿の具体的な考察の対象である。

この問題を考察する上で、中国農村における贈与と人的紐帯との関係をフィールドワークに基づいて論じた閻 (Yan 1996) の研究が注目しに値する。閻は中国黒龍江省の農村における贈与 (gift giving) に着目し、市場経済への依存が急速に拡大してゆくなかで、人々が戦略的にネットワークを構築してゆく具体的過程を明らかにした。この研究によって農村における贈与が<關係 guānxi>を確認すると同時に再生産させる機能を持つことが明らかとなった。ここでいう<關係>とは、中国社会に特徴的な人々の紐帯のあり方を指す概念である。この機構を作動させる基本的プログラムの役割を果たす人々の感情の

動きを<人情 rénqíng>と呼ぶ。農村社会は各人の張り巡らす<関係>の集積として形成され、この網の目の上を贈与が流れてゆく。また闇は中国における贈与が送り手ではなく受け手の権威を高める作用があり、人々は他人からの贈与を期待して贈与を行なうことを明らかにした。

本稿では上述した問題を論じるなかで、このような<関係>の再生産過程をより精緻な形で理論化することを目指す。このための理論的足がかりを、ギアツによるモロッコのスーク suq (バーザール bazaar) についての研究に求めたい。ギアツは1960年代半ばからモロッコの中部アトラス山脈の麓にあるセフルーという市場町についてフィールド調査を行ない、その地域のスークの仕組みを明らかにした [Geertz, 1979]。この論文のなかでギアツはセフルーのスークが、様々な動機で、様々な周期で、様々な行為により参加する多様な人々によって構成され、人々の中の絶え間ないコミュニケーションの「渦 swirl」として形成される機構であることを発見した。そしてこのコミュニケーションが、「常連化 clientalization」と「交渉 bargaining」の相互作用を通じて、「おしゃべりな群集 talkative mob」のつくりだす喧噪のただなかで再生産されるというモデルを提出した。

我々はこのモデルが、中国農村における人々の相互作用をモデル化する上で重要な役割を果たすと考えている。なぜなら我々は、中国では(1)伝統的に市場的貨幣的關係が農村地帯にも深く浸透しており、(2)その前提の下で共同性を確保するための戦略やルールが発達し、(3)さまざまな日常的接触やおしゃべり、さらには労働の相互提供や贈与といった行為を通じて<関係>を構築・再生産する機構が歴史的に形成された、と認識するからである。中国農村社会はそのような<関係>を要素として自己再生産する構造と見なし得る。この様相はギアツが描いたモロッコのバーザールと共通性があり、そのモデルを理論的な出発点とすることを可能としている。

残念なことにギアツはそのモデルの構成要素である「常連化」と「交渉」と

「おしゃべり」の相互関係を明確にしていない。しかも、この機構が具体的な場面でどのように作動するかを示す事例すら挙げていない。この意味でギアツのモデルは具体性を欠く上に未完成であるという欠点を持つ。本稿はこの欠点の克服をも目的とする。

本稿は以下のように構成されている。第2節では〈相夥 xiānghuǒ〉と〈雇 gù〉という労働提供方式を説明し、その具体的な様相を家屋の建築における労働提供に注目しつつ詳述する。第3節ではこの労働供与方式と〈関係〉と「おしゃべり」の相互関係を理論的に構成して一つのモデルを提出する。第4節ではこのモデルを廻る諸論点について考察を加える。

## 第2節 〈相夥〉と〈雇〉

我々がフィールドワークを行っている陝西省北部地域では、労働提供について〈相夥〉と呼ばれる相互扶助方式と〈雇〉と呼ばれる現金決済方式が隣り合わせに混在し、人々の〈関係〉の濃淡に従って使い分けられている。〈相夥〉という言葉は主として密接な〈関係〉にある人々の間での無償の労働提供を指し、母親の洗濯を娘が手伝うような軽い労働から、葬式や結婚式の手伝い、さらには数日から十数日に及ぶ家屋建築の手伝いまでを含む。これに対して〈雇〉は、現金を代価とした労働力の提供を指す。

ここでは家屋の建築という大量の労働力が調達される場面に注目し、この二つの労働調達方式の具体的な様相を説明することから始めよう。まず、これについての三つの特徴的な例を以下に掲げる。

第一の例は、かつて村の会計をつとめていた男性 M のケースである。M は90年代前半に7連の〈窯洞〉<sup>(2)</sup>を建設した。この際に総計40名以上の男性が入れ替わりで計20日あまり労働を行なった。ところが M はこの労働に対して一元も支払っておらず、日々の食事や酒、タバコをふるまったに過ぎない。すな

わち、全員が〈相夥〉の形態での労働提供を行なったのである。

Mは、村の〈会計 kuàijì〉を長くつとめていたほか、村の冠婚葬祭などで重要な役割を果たし、またシャーマン（同地では〈馬童 mǎtóng〉と呼んでいる）として病気治療を行うこともあった。こうした活動の結果、Mは村の中に層の厚い人間関係を構築しており、〈窑洞〉を建築するにあたって、何十人もの人が次々と〈相夥〉に訪れ、結果として誰一人雇うことなく、〈窑洞〉を建設することができた。

もちろん、彼と4人の息子も毎日現場で働いたほか、本人と息子の嫁は終始、働きに来た人々の食事の準備に明け暮れた。このように大量の〈相夥〉の提供を受けることができた背景には、4人の息子が将来、同様の労働を〈相夥〉で返す心積もりと、能力があることも作用している。この事例は、〈相夥〉が過去と未来の〈関係〉のありようと密接に関連することを示している。

第二の例はこれと対照的なケースである。80年代初期に結婚して以来、20年以上にわたって出稼ぎを行っていたLは一年にひと月も村にはもどって来ない。農業は妻が家族分の請け負い地をほとんどを自力で耕作している。農作業における労働の相互供与はかつて近所に住んでいた女性との間で、植えつけと刈り入れのシーズンに数日間労働を交換する程度である。この家族は長男を結婚させるために新しい家屋を建築したが、これは〈窑洞〉ではなく、レンガとコンクリートを使った〈平房 píngfāng〉（平屋）であった。この家屋建築のために使った労働力はすべて現金決済の〈雇〉に依った。

これは、出稼ぎを続けてきたために村の中で労働提供をほとんど行なわなかった人物の例である。このように現金獲得目的の労働を外部で続ける場合、村内部で労働供給を受けるには〈雇〉の形態によらざるを得ない。その理由はこの家族が〈相夥〉による労働提供を他の村人に対して行なってこなかったこと、またたとえ〈相夥〉による労働提供を受けたとしても、この家族にはそれを長期的に返しうる労働力基盤がないこととである。

また現金獲得によって裏打ちされた行動のために生ずる労働需要の決済には、〈相夥〉が適用されるのではなく、〈雇〉の形態が採用されるのが普通であるという事情もこれに加わる。例えば、タバコを栽培する際に必要な労働には現金支払いが多く見られるのに対し、タネイモを切る作業などは〈相夥〉で行われる。それは、タバコが商品作物であるのに対してジャガイモが自家消費財としての性格が強いためである。この家の労働力不足の原因が出稼ぎによる現金獲得のためであるので、外部からの労働力を調達する場合には現金による決済を必要とすることになる。

この家族が〈密洞〉をつくらず〈平房〉を建てたのも、調達できる労働力が少ないことと関わっていたと考えられる。〈平房〉は、コンクリートのスレートやレンガなどの扱いやすい建材を用いるため、〈密洞〉建設にくらべて材料経費は高くつくが、工期は短くなり、必要な労働は〈密洞〉より少ない。またこの新築の〈平房〉はガラスの破片が埋められた高い塀で囲まれており、入り口の厚い鉄扉に大きな鍵が付いている。現金によって購入された家具や電化製品などが家の中に多く並べられていることがその主たる理由であるが、戸主が長期間村にいないために、村落内に強固な社会関係を築いていないこともその重要な背景をなす。後述するように隣村には〈包工頭 bāogōngtóu〉（出稼ぎ請負頭）として財をなした2軒の家があるが、そのうち村における〈関係〉を積極的に維持している一家の家屋はそうした防衛機能をほとんど持たないのに対し、村での社会関係をほとんど放棄している一家の家屋は堅牢な要塞のように硬く入り口を閉ざし、あらゆる塀の上にガラスの破片や鉄条網が張り巡らされている。つまり家屋の排他的な外観は、その家の村落における社会関係を一定程度反映しているのである。

第三は廟<sup>(3)</sup>の〈会長 huìzhǎng〉をつとめていたSのケースである。尚、〈会長〉とは廟を運営するボランティア団体である〈廟会 miào huì〉のメンバーのことを指す。Sは廃屋になっていた人民公社時代の製紙工場の建物を購

入し、これを改修して家屋とした。この家屋の改修には〈大工 dàgōng〉と呼ばれる技術労働者一名が18日間雇われた。それは〈磚瓦工 zhuānwǎgōng〉と呼ばれる煉瓦職人で、一日35元に3度の食事とタバコ一箱が支払われた。このほかに一般的な労働力である〈小工 xiǎogōng〉として〈自家人 zìjiārén〉および友人がそれぞれ数日づつ労働を提供した。これらは〈相夥〉による労働で、基本的には一人につき2～3日の労働提供であり、その報酬も3度の食事とタバコのみであった。ところがそこで興味深い現象が見られた。〈相夥〉に来ていた友人Lが18日間にわたって労働を提供し、施主であるSはこの人物の労働が、〈関係〉を基礎とする無償労働として処理するには過大であると判断し、報酬を支払うこととしたのである。Sが提示した額は360元で、その計算根拠は〈雇〉によって〈小工〉に支払う一日20元に18日分の日数をかけたものであると考えられる。ただし、この両者はそもそも〈関係〉によって労働を提供しているのだから、純粋な〈雇〉で精算してしまうことは適当ではない。そこで友人のLは提示された360元のうち、200元だけを受け取ることによって〈相夥〉と〈雇〉の間の適正な値をとった。

この事例は特に注目に値する。なぜならこれは〈雇〉と〈相夥〉が単純な二者択一ではなく、その中間の支払形態のあることを示しているからである。この場合〈雇〉と〈相夥〉の中間のどの水準の支払水準にするかを決定していたのは受け取る側で、提示する側は受け取る側に判断をゆだねるべく、ひとまず〈雇〉の形で価格を提示している。そして最終的に受け渡された額が両者の〈関係〉の濃淡を示しているのである。

我々は聴き取り調査の過程で、家屋建築の事情について建築主の記憶が極めて詳細かつ鮮明であることを発見した。彼等は何年の何月何日に工事を始めて何日に終わり、その時に誰と誰が何日来て、それが〈相夥〉であったか〈雇〉であったか、その中間であったか、また彼等に何を食べさせ、どういう銘柄のタバコを提供したか、という情報を正確に記憶し、あるいは記録として残して

いる。これは家屋建築に限ることではなく、葬送や結婚式などの儀礼に関しても同様である。興味深いことに、こうした労働交換や雇用に関する情報を、当事者と〈関係〉の密接な人もよく記憶しており、〈竈洞〉建築に誰が来て、誰が〈相夥〉で、誰が雇われていたか、を当人と同様に答えられるほどである。

また、我々はこのような労働提供に対する謝礼の支払等で紛争が生じていないかどうかを調べた。この質問に対して村人は、そうした問題は起こらないと断定する。それは〈雇〉においても〈相夥〉においても基本的に同じである。実際に村人同士の協力や雇用関係において、予想した額が支払われなかった、あるいは過大な額を要求されたという問題になったケースをほとんど聞いたことがない。

我々の知る唯一のトラブルは、筆者の一人（深尾）が、1995年に村で主催した芝居上映の際に、神の位牌を下ろす儀式において〈唢呐 suōnà〉（チャルメラ）の演奏を依頼した〈唢呐手 suōnàshǒu〉（チャルメラ吹き）が、追加の報酬を求めて、我々を訪ねてきたという一件である。当初、一日8円でよいといていたところが、1日13円に変更して欲しいと、イベントがすべて終わってから筆者を訪ねてきた。

この稀なトラブルの原因は、（1）村の中で発生する雇用労働の中で、儀礼の際に雇われる〈唢呐〉や太鼓などの演奏が、儀礼の性質や支払い主の財力に応じて価格が変動する唯一の事例であること、（2）主催者が村の外の人間であり、村の人々との〈関係〉の濃淡について、十分な認識が確立されていなかったこと、にあるものと考えられる。

村人の中で労働雇用に関して齟齬が生じないのは、（1）村の内外で貨幣を介して雇用する場合の労働報酬の相場が明確に認識されていること、（2）〈相夥〉による労働交換を支える〈関係〉について、村人の中で相互に一致した認識が存在すること、この二つが少なくとも条件として挙げられる。

聞き取り調査の結果、この村では〈雇〉の場合の謝礼の水準についての合意が形成されていることが確認された。しかもその時間的推移も人々にはっきり



中国陝西省北部農村の人間関係形成機構

と認識され、記憶されている。〈窑洞〉建築において雇われる人は、〈大工〉と〈小工〉に分けられる。〈大工〉というのは、石工や木工、さらに〈泥匠 níjiàng〉と呼ばれる室内の塗装をおこなう職人をさす。2002年11月時点では、〈泥匠〉がもっとも高く、1日35元である。つづいて石工と木工は1日20から25元である。これに対して、技能職ではない〈小工〉は一日15元から17元ということである。現金のほかにないずれの場合も一日3回の食事と、タバコを吸う人の場合には、一箱1.5元の〈公主 gōngzhǔ〉という銘柄のタバコを一日一箱支給する（表1参照）。これに対して〈相夥〉の場合は〈相夥工 xiānghuǒ-gōng〉と呼ばれ、報酬はなく、3度の食事とタバコのみが支給される。

表1 村の売店で売られているタバコの銘柄と価格（2002年11月現在）

小橋	1元
公主（黄色）	1.5元
金絲猴	2元
公主（白色）	2.5元
猴王（ソフトケース）	3元
猴王（ハードケース）	4元

同一の相場を共有しているのは大體、県城と県内の隣接する農村地域、といった範囲であるという。もし中国農村社会の「基礎的単位」を求めるとするならば、同じ〈雇〉の相場が通用している範囲をとることも可能であろう。また、この同一相場範囲は閉じたものではなく、外部と常に連動している。連動しているのは更に大きな都市（具体的には蘭州・西安・包頭・北京など）における賃金の相場や穀物価格の相場であると認識されている。

その相場は現在では概ね安定しているが、月ごとに変化していた時期もあった。ある村人の記憶によれば、88年までの相場の変動は次のようであった。

時間	人民公社時期	1980~1985年	87年	88年
大工	1.5元	3元 5元 7元 8元	6元 7元 8元 10元	20元 25元
小工	1元	2元 3元 5元 6元	4元 5元 6元 8元	18元 20元

以上の数字の中で1年間にいくつかの数字が出ているものは、月単位で相場

が変動した時期であり、87年から88年にかけての急激な変動以降は、比較的落ち着いており、90年代後半、同地域で早魃が長引いてからはむしろ下降傾向にある。こうした相場はかなり厳格に守られており、雇用者が裕福であっても貧しくても基本的にこの相場に従って支払われる。人々は、この相場の変動と、実際にどこでだれがどのような条件で雇われたかについて詳細に情報をつつめ、常に更新している。その際に重要な機能を果たしているのが「噂」〈消息 xiāoxi〉である。尚、日本語の「相場」あるいは標準中国語の〈行価 hángjià〉に相当する表現は地元では用いられず、あくまで〈工銭 gōngqián〉と呼ばれている。

もう一方の〈関係〉についての情報は個別のものであり、〈雇〉の際の〈工銭〉の相場ほど公開されてはいない。とはいえ、村人が互いにどのような〈関係〉であるかについて村の誰もが基本的な見取り図を持っており、その変化が生じた場合にもかなりの速度で情報が更新されている。〈関係好 guānxihǎo〉と認識しあう親密な者同士では、〈相夥〉も頻繁にやりとりされ、村人も誰と誰が〈相夥〉を行っているかについて、情報を共有している。

例えば、先に挙げた〈窑洞〉建築の事例として、誰がどの家の〈窑洞〉建築に〈相夥〉で助けに行ったか、という情報については、当事者以外の多くの人々が記憶している。しかし先の〈雇〉に関わる情報と異なって、〈関係〉の内部における種々のやりとりについては詮索の度合いが格段に弱まる。

〈窑洞〉建築に関するものではないが、我々の体験した事例として次のようなものが挙げられる。既述のごとく、村に滞在している際、誰かに何らかの支払を行なう毎に、他の人からその仕事の内容と支払金額について頻繁に詮策を受けた。例えば調査者が長期に宿泊している農家に対する謝礼の金額、毎日の食事の内容などである。家主の女性につくってもらった〈布鞋 bùxié〉（布靴）をはいて村を歩くと、「誰が作ってくれたのか」「いくら払ったのか」といった質問をしばしば浴びた。実際の額を伝えると、調査者が世話になっている農

家にどのような影響を与えるか図りかねていたが、あるときふと「これは<関係>だから」と答えてみると、人々の詮索はそこで停止した。(深尾ほか 2000, 117頁)

調査者の主催で、村に劇団を招聘したことがあったが、劇団に支払った金額についても、<関係>による価格であると答えると、金額の詳細を持ち出さなくとも、人々は納得した。もちろん、我々が村に滞在する際の宿泊費などについては、その後も詮索の対象にはなっているものの、それはパブリックな情報としてではなく、憶測を含んだ半ば隠蔽された情報として流通している。

つまり、すでに示唆したように、<雇>をはじめとする<関係>の要素の少ないやりとりに関しては、噂が頻繁に執拗に取り交わされ、徹底的に情報の共有が図られるのに対し、<相夥>をはじめとする<関係>の内部におけるやりとりについては、情報の詮索の手が緩められる。しかもその情報そのものが<関係>の濃淡によって、流れたり流れなかったりする。一般に、<関係>の中で処理されている情報は、面と向かって聞いても、明らかな答えがかえってこないか、正確な情報が与えられるかどうか疑わしいと考えられている。

村人に、<関係>をめぐるやりとりに関して、明らかにしたくない情報について聞かれたらどうするか、と質問したところ、「事実とちがう答えをする」という返答が返ってきた。このことについて聞かれた方が「嘘をつく」ことを聞く側もあらかじめ予期している。またこうした質問は、<不合适的 bǔhéshìde>ないしは<不適説 bǔshìshuō>つまり、話すに適しないことと認識されている。

このように、この村のなかにおける情報の流通過程には次元の異なる2つの層が存在し、使い分けられていると同時に、その両者に関する情報のやりとりには違いが存在する。<公開 gōngkāi>たるべき情報が公開されない場合には、人々の間の疑惑を招くことになる。そのような場合の詮索や噂話は特に執拗であり、たとえば郷政府の幹部に対する村政府の接待の内容に疑惑が生じた際には、その接待の場面の片づけに行った人が目撃したという食事の残飯の詳細や

ビール瓶の本数が克明に噂された。

また、村に下ろされた水利費や、学校建設費などの用途についても、常に人々の関心が向けられ、いささかでも明らかでない情報が存在すると、すぐさま疑惑をひきおこすものとなる。これらは、〈公開〉であるべき情報についての人々の監視と詮索が非常に活発であることを示している。またそれは、〈雇〉における相場の事例と同様、地域で共有すべき価格や相場に関する情報への人々のあくなき探求が、地域における情報の場を形成する重要な要素となっていることを示唆している。

以上の内容をまとめよう。まず陝西省北部の農村における労働供給方式には、純粹の現金払である〈雇〉、純粹の無償労働提供である〈相夥〉、その間の様々な水準の中間形態がある。その形態を決定するのは両者の〈関係〉の濃淡である。また、人々はそのような現金支払の相場に敏感であり、執拗な詮索と噂を行なうが、それはほぼ〈雇〉の形態の場合に限られており、濃い〈関係〉のなかで行なわれる支払には踏み込んで立ち入ることが少なく、それゆえ〈関係〉内部の情報が広範囲に流通することは稀である。

### 第3節 農民間の相互作用のモデル

本節では第2節で論じたような具体的な判断がどのように行なわれているかを説明するモデルの構築を目指す。そのための出発点として、本稿の冒頭にのべたように、モロッコのスーク（バーザール）についてのギアツの議論が有効である。そこでまずギアツのモデルのエッセンスを抽出することから始めよう。

#### 3.1 ギアツのモデル

ギアツはまずスークにやって来る人々を「スーク suwraq（市場参加

者)」として把握する必要を主張する。その意図は、個々の市場参加者が担う具体的な役割以前に、そこに参加してコミュニケーションを行なっているというその基礎的役割を重視するからである。目的が何であれ、ただの散歩であっても、とにかくスークという場に出現して歩き廻る wander about 人々の総体が、市場そのものの再生産されるための場を形成することになる。これらの人々が相互に取り結ぶ「関係 partnership, relationship」の「複雑 intricate」な構造物の上で、情報と物資の「やりとり exchange」が行なわれる。このような動的なネットワークの総体がスークなのである。

また、ミクロレベルで見ると、人と人との個々の相互作用には「交渉 bargaining」と「常連化 clientelization」という二つの層がある。交渉とは「情報探索 information search」の具体的に行なわれる過程である。この交渉の場面で相対する人々は、たとえば売り手と買い手という非対称な立場にあり、商品の価格・数量・品質を廻る果てしない情報交換と折衝を繰り返す。この場合、両者は本質的に敵対的な関係である。一方でこのような交渉を繰り返すうちに両者の間に常連化が起きる場合がある。

こうして両者の関係が強化されると、この関係を通じて交渉という情報探索過程が展開されることになる。つまり「常連化」は「関係をつくる行為」であり、「交渉」は「関係を実効化する行為」なのである。常連化と交渉は一方がもう一方に従い、しかも他方の変化を惹起するという円環の関係にある。



ギアツ自身は明確に指摘していないが、この二つの層のタイムスケールが大きく異なる点は注意に値する。すなわち交渉というのはその場限りのやりとりであり、秒か分のオーダーである。ところが常連関係は場合によっては何十年と続くものであり、常連化の層の継続時間は交渉の層よりも遙かに長い。脳の

学習過程のモデルになぞらえるなら、交渉の層はニューロンの発火に、常連化の層はニューロン同士の結合の強さの調整過程に相当する。

モロッコのセフルーのスークには、様々な出身地・文化・習慣・宗教・職業を持つ多様な人々が多様な行為を通じて関与しているが、それぞれの市場参加者が個人的に形成するやりとりの常連関係を構成し、そのように構成されたネットワークとしてスークが成立しているため、この多様性が道理に叶った形で編成され、安定的な形をとることが可能となる。

### 3.2 <相夥>と<雇>のモデル

ギアツのモデルは抽象的で思弁的なものであり、具体的な人々の相互関係を表現するには様々な変更を加える必要がある。我々がギアツから継承するのは、

- (1) 異なるタイムスケールの二つの層、
- (2) 二つの層のダイナミカルな相互作用、
- (3) このミクロ的機構の結果として構成される人々の関係の構造物としての全体、

という三つの理論装置である。

陝北の村で長いタイムスケールの層に属するのは<関係>である。短いタイムスケールの層に二つの性質の異なった範疇が含まれる。ひとつが<雇>であり、もうひとつが<相夥>である。この両者の最大の違いは<相夥>が<関係>を前提として行われ、しかも<関係>のありように影響を与えることを主たる機能としている点である。言い換えれば<相夥>は<関係>というメモリへの「書き込み操作」である。勿論、ギアツの「交渉」という市場的で敵対的な関係が「常連化」の機能を持つように、<雇>もまた<関係>と影響関係を持つはずである。とはいえ、主たる機能が現金と労働力の直接的交換である点は動かない (Yan 1996, 218-9頁; Carrier 1992, 202頁)

村人は〈関係〉がある程度密接な人に対しても、〈工錢〉を支払って〈雇〉による労働力調達を行なう場合がある。そのような手段を選択する理由を村人に聞くと、〈麻煩 māfan〉（面倒）であるからだ、と答えが返ってくる。これは〈相夥〉が長期のメモリへの書き込み操作という「面倒」を伴っており、〈雇〉によればこれを回避するというメリットがあることを示す。

では具体的にある人物Aが別の人物Bから労働力の提供を受ける場面を想定してみよう。この時AはまずBとの〈関係〉の水準を勘案し、〈相夥〉でゆくべきか、〈雇〉でゆくべきかを考えねばならない。尚、ある程度の〈関係〉のある場合でも、上述の如く〈麻煩〉を避けるために純粹の〈雇〉を採用することもあり得る。

中間形態を採用する場合には、全体の何割を〈雇〉にするかを考慮せねばならない。全くの他人と密接なく関係〉を両極端としよう。支払側のAは、Bとの〈関係〉の水準がこの中間のどこにあるかをまず判断する。次に三番目のS氏の例で見たように、労働量が〈相夥〉で提供されるには過大であると考えた場合、Sの場合はまず〈雇〉によって雇用した場合の額が提示され、受け取る側がその〈関係〉の濃淡に応じて受け取り額を決定した。ただし、この場合もあくまで〈雇〉の場合に適用されるべき謝礼の相場を起点として、額が決定されている。〈関係〉が濃いほど受取額は少なくなり、純粹の〈相夥〉と判断された場合はゼロになる。

このような労働の調達とその支払が行なわれると、それはAとBの〈関係〉の次ステップにおける水準に影響を与える。例えば、それまで日常的に良好な間柄を維持していても、それほど親しいとはいえなかった者が、〈窑洞〉建築の際に何日にもわたって〈相夥〉に訪れたことにより、さらに親しさを増すこともあるかもしれない。そもそも、〈関係〉そのものが形成されるプロセスがこうした、相互行為の蓄積過程であるとも言える。また、儀礼の際に贈る〈賬 zhàng〉と呼ばれるご祝儀の額は、あらかじめ当人同士によって確認されてい

る〈関係〉の濃淡を反映したものであるが、その額が明示されることによって、〈関係〉を再度確認したり強化したりする働きもあると考えられる。つまり、〈関係〉は行為の蓄積という実践によって形成されるのと同時に、その〈関係〉のありようが、次の支払い形態に影響を与え、その結果がまた〈関係〉の濃淡に反映される。両者は円環関係にあり、〈関係〉の濃淡はこうした行為と実践によって時間発展し、時に消滅したりもするのである。(Yan 1996, 98-121頁)

すでに論じたようにこの判断過程を間違いなく実行するために必要なことは、

- (1) 〈雇〉の場合の相場を知っていること、
  - (2) 〈関係〉の濃淡を支払形態に変換する函数を相手と合わせること、
- である。

先に、〈雇〉による支払いについては入念に噂され、詮索されるのに対し、〈相夥〉の内容になるとその詮索の手が緩められるという現象を示したが、これは上のモデルを前提とすれば合理的に理解することができる。すなわち、〈関係〉の濃淡の水準についての情報が個別的なものであり、しかも時間的に変化する可能性を持っている以上、〈関係〉が密接な場合の謝礼の支払が適当かどうかを第三者が判断することは難しい。それゆえ多数の人間が共通の話題とし得るのは、〈関係〉との相互作用を伴わない〈雇〉の場合の謝礼に限られる。〈雇〉についての入念な噂は単に村人が「詮索好き」であることを示すばかりではない。それによって、常にその地域における「相場」を確定し共有する作業を行ない、上の(1)を実現しているのである。

次に(2)の「〈関係〉の濃淡を支払形態に変換する函数」をどうやって合わせるか、という問題を考える。この調整は(1)ほど容易ではなく、また(1)ほど一般的に調整しておく必要のある問題でもない。一定の密接な〈関係〉にはいつている人々との繰返しのなかで調整をすれば良いのである。

我々が見聞したところの事例では、谷の両側で母と娘が行っていた情報交



換の例がある。この母子と〈関係密切 guānximìqiè〉な人が县城の病院に入院し、娘がその病院にお見舞いに行った際に何を持っていったか、がその話題である。まず母親が「現金か、おみやげか」と谷のこちら側の家の庭先から娘に問いかけ、これに対して谷の向こう側で農作業をしていた娘が「20元持っていったよ」と返事をしてきた。こうした情報は一般に広がるとは考えにくく、〈関係〉の濃い人の中で、必要に応じて交わされる。

知人や親戚間で取り交わされた借金の内容も、公になりにくい情報である。ことに利子がゼロとなるような貸し借りや金銭の授受については、情報が表面にでることはない。それはその情報が公になったとしても、他者による参入や置き換えが不可能であるため、公にする圧力が比較的低いためであると考えられる。

また楊家溝村では、儀礼の際の祝儀の額の相場がこの調整の問題をより広い範囲で解決する手段として機能している。結婚式や葬式の際に送られる祝儀や香典は関係の濃淡によって微妙に差異が設けられ、序列化されている。〈账单 zhàngdān〉と呼ばれる「祝儀帳」は公開のもので、人々はそれによってその家をめぐり関係の濃淡を認識することができる。祝儀を送る際に、送る側は日頃の〈関係〉を考慮して〈帳〉の額を決定し、その時点で関係の可視化の作業が行われていることはいうまでもない。しかしここで重要なのは個別の〈関係〉を確認する意義があるのと同時に、〈関係〉の濃淡を現金に変換する際の換算率と傾きが確認されるという点である。

表2は村の劉という姓の家で行われた結婚式の祝儀の額である。一般的な〈関係〉の友人や知人が20元であり、〈関係〉が密になるにつれて祝儀の金額は上がる。この上がり具合が〈関係〉を支払形態に変換する函数の形を示している。この種の儀礼が行なわれるたびに同様の表が作成され、噂によって人々に周知徹底される。これを基準にして、〈関係〉の強さを現金に変換する「函数」の調整が可能となるわけである。

表2 楊家溝村で行われたある婚礼の祝儀表

1	錢進○	188元	母方祖父
2	錢隨○	186元	母方オジ
3	呂宏○	180元	母の姉の夫
4	呂德○	180元	母の妹の夫
5	張福△	100元	母方義理オジ
6	呂垂○	60元	母の姉の子
7	呂垂△	60元	母の姉の子
8	呂垂×	60元	母の姉の子
9	錢福○	40元	母のオジ
10	劉樹○	188元	祖父
11	劉錦○	168元	父方オジ
12	劉錦×	168元	父方オジ
13	馬小○	168元	
14	馬成○	40元	大朋親
15	官真○	40元	大朋親
16	馬正○	20元	
17	劉樹○	20元	
18	馬正△	20元	
19	高世○	20元	
20	馬竹○	60元	友人・関係密接
21	常錦○	40元	
22	楊德○	20元	友人
23	劉錦△	20元	友人
24	劉永○	20元	友人
25	馬樹○	20元	友人
26	高治○	20元	友人
27	高 ○	20元	友人
28	馬來○	20元	友人
29	張××	20元	友人
30	馬智○	40元	老朋親
31	張 ○	20元	
32	曾戰○	28元	還礼
33	馬 ○	20元	
34	馬明○	20元	
35	馬明△	20元	
36	高海×	20元	
37	馬汝○	28元	
38	劉錦▽	40元	
39	郭価○	20元	
40	周錦○	40元	父の友人
41	劉 ○	40元	父の友人
42	劉 △	40元	父の友人
43	劉錦□	40元	父の友人
44	劉錦◎	40元	父の友人
45	劉戰△	20元	
46	馬光△	20元	
47	高守○	40元	
48	楊志○	40元	
49	高守△	28元	
50	劉樹△	20元	
51	馬 △	40元	
52	劉樹×	48元	自家
53	劉樹▽	48元	父方オジ
54	劉錦☆	46元	父方オジ
55	上会○	44元	
56	馬光□	44元	自家
57	李文○	44元	親戚
58	高同○	44元	
59	馬 ▽	20元	
60	楊汝○	38元	遠い親戚
61	高智○	38元	遠い親戚
61	馬樹△	38元	遠い親戚
62	姜××	38元	遠い親戚

\* 人名は、個人名の特定を避けるために一部を記号化した。輩行による親族の遠近の違いがわかるように中一文字は、不明な場合をのぞいて記載した。同じ輩行や同姓で異なる名前の場合、記号をそのつど○△×▽☆というように使い分けたが、この記号が特定の文字に対応するものではない。なお<大朋親 dàpéngqīng>は結婚した本人の親友、<老朋親>は親の親友の意味。

この表ではほとんどの人は親族・友人関係の階層に従って贈与をおこなっている。最も高額な贈与をおこなっているのが母方と父方の祖父の188元であり、そのあとは母方の上位親族が続く。全体に父方よりも母方の親族の方が大きな額の贈与をおこなっている。これは<関係>形成における女性の役割を強調

中国陝西省北部農村の人間関係形成機構


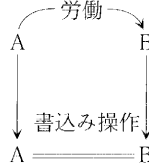

	タイムスケール	<雇>	<相伙>
		公開の噂の対象	閉じた噂の対象
市場	短時間の層		
<関係>	長時間の層	A                  B	

図3 長時間スケール層と短時間スケール層の関係

した間の主張と整合している。(Yan 1996, 64-65頁)

父の友人は40元、本人の友人や特に強い<関係>のない人々は最低の20元を出している。28元出している人物は以前に受けた贈与の還礼を含んでいるためである。このなかで注意すべきは20番の人物で、これは本人の友人であるが、配偶者同士が同じ村の出身であり、特に<関係>が密接であるため60元という母方親戚クラスの贈与をおこなっている。この表では特に密接な<関係>にない人々の出した20元が<雇>の相場に相当しており、<関係>が濃くなるに従って贈与額が大きくなってゆく。

最後に注意すべきは、「噂」の展開する場として<関係>が機能している点である。<雇>の謝礼についての情報を最初に聞き出す人物は、その当事者と密接な<関係>を持つ人物である。<関係>の濃い場合の変換式の調整は、主として密接な<関係>にある者同士の間で行なわれる。こうして構成される複雑な<関係>のネットワークの上で噂が広がり、変換式が調整される。噂される内容のうち<公開>のカテゴリのものは<議事台 yishìtái>と村人が呼ぶ村の情報ステーションなどで展開されるおしゃべりの場に持ち出され、共有される情報となる。<雇>の<工銭>の相場はこうして決定されてゆく。

以上のモデルは次のように図示することができる。まず、短い時間スケールの

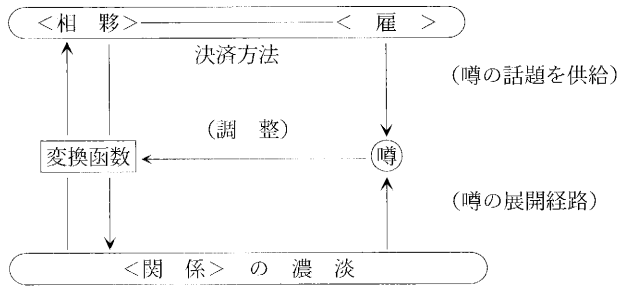


図4 決済方法、<関係>、噂の関係

層と長い時間スケールの層を明示する形で表現すると、図3のようになる。短い時間スケールの層は市場的で<公開>の噂の対象となる。ここで行われる労働と現金のやり取りはその場で決済されて消滅してゆく。これに対して、長い時間スケールの層は個々人の間に結ばれる<関係>を要素として形成されており、この内部の情報は閉じた性格のものである。労働の提供が<相夥>で行われる場合には<関係>の濃度を参照しつつ決済がおこなわれ、そのやり取りによって<関係>のレベルへの書き込みがおこなわれる。

「労働提供の決済」、「<関係>」、「噂」、という三項の関係は図4のようになる。すなわち、「<関係>」を基礎として「噂」が展開し、それによって「変換函数」のレベルの調整が実現される。この「変換函数」を用いて「<関係>」の濃淡が具体的な支払形態に変換される。具体的な支払が行なわれると、<雇>の形態の場合は広く「噂」の話題を提供し、そうでない場合でも常連関係内部での情報交換を惹起する。また、実際に行なわれる労働の提供とその決済によって「<関係>」が確認され、場合によってはその内容の変化が起きる。

#### 第4節 考察

本節では前節で論じたモデルを基礎として、いくつかの関連する問題を論じ

る。ここで採り上げるのは、ギアツのモデルとの比較、閤の贈与についての研究との関係、羅紅光の楊家溝についての議論の検討、交換の等価／不等価、中国農村共同体論の再検討、村を越えた水準での〈関係〉の構造化、コミュニケーション・パターンの含意という諸問題である。

#### 4.1 ギアツのモデルとの違い

前節で論じたように、ギアツのモロッコのスークについてのモデルは魅力的かつ有用である。しかし問題が無いわけではない。第一にギアツのモデルでは「交渉」と「常連化」が相互に作用しあう関係にあるという重要な指摘がなされているものの、それが具体的にどのように作動するかが全く論じられていない。それゆえギアツの議論はモデルの輪郭を描いたに留まっている。

第二の問題は、そのような交渉と常連化の円環関係が実際に作動している具体例が挙げられていない点にある。論文全体は詳細なフィールドワークに基づいて書かれているが、肝心のスークのモデルは抽象的な思弁的モデルにすぎない。

第三の、そしてより本質的な問題は、ギアツが、この円環関係を基礎として構成されるバーザルの機構全体を、個人が情報探索するための装置と矮小化して理解している点である。ギアツはスークにおける情報の質が悪く、不足し、偏って分布し、非効率的に伝達され、それゆえ極めて高い価値を持つ、と考える。これはスークには、非市場経済の儀礼的制度がもたらす信頼し得る知識の伝播も、産業経済が依存する広告などの情報の生産と伝達のメカニズムも無いためである。こうして個々のスークは情報探索技術を磨き上げることになり、そのために複雑な顧客関係のネットワークが出現すると主張する。

ギアツはスークが新車市場よりも中古車市場に近いと指摘する。すなわち新車の場合は個々の製品の品質のバラツキはあまり問題とならず、価格の重要性

が高い。それゆえ消費者は多数の販売店の値段の全体的分布の把握を目指す。一方、中古車の場合は個別の車両の事故歴や前の所有者の使用方法などといった情報をつかむことが重要となる。そのために消費者の探索は狭く、深いものとなる。スークにおける情報探索は後者に近いと言う。

各個人が効率的な情報探索方式を選択するというこのストーリーは実にわかりやすい。しかしこれではスークのスーワークが、所与の環境の下で合理的に判断を下し、最適な情報収集戦略を採用している、ということになる。すなわち、この説明に飛びついたため、ギアツは一度玄関から追い出したはずの個人主義的で合理主義的な「最適化」の観点を、窓からうっかり再導入するという代償を支払うことになったのである。交渉と常連化の円環関係というダイナミカルな観点に到達しながら、その機構の内容を真剣に考察せず、具体例も収集しなかったのは、このためではなからうか。その結果、ギアツの議論は完結しない中途半端なものとなった。

第四番目の問題は、ギアツが交渉の層と常連化の層におけるタイムスケールの違いを明確に意識していない点にある。〈相夥〉と〈関係〉のダイナミカルな円環関係においてみたように、目に見える形でやりとりされる交渉は、基本的に一回きりのものである。当然〈窰洞〉建築における労働提供のように、誰が誰に対して何日労働を提供したか、という内容は、10年、20年という時間の中で記憶され、保存される。しかもそれが交渉の層において保存されているのではなく、〈関係〉の層に受け渡されて保存されている点に注意すべきである。この点に関しては一小節を設けて詳述する。

システム全体が変動しながら再生産するというダイナミカルな視点を徹底するための鍵は、ギアツが繰り返し言及しながらもモデル構築の段階では素通りした「おしゃべりな群集 talkative mob」の概念にある。我々が陝北で観察したように、この「おしゃべり」こそが儀礼的的制度も広告会社も欠如したスークにおいて情報を流通させる機構であり、「常連化」と「交渉」と並ぶ第三の

項目なのである。

我々は(1) 第三の項目を「噂」としてモデルに組み込み、(2) これによって「<相夥>/<雇>」「<関係>」「噂」の三項の具体的な作動を特定し、(3) その作動の諸場面の具体例を示した。さらにその記憶装置として働く<関係>の層と、具体的な行為のレベルとを時間スケールの観点から明確にわけて考えることにより、個人主義的で合理主義的な最適化というスタティックな概念の継ぎ木をおこなわず、ダイナミカルな再生産の視点に徹したままで議論を完結することが可能となったのである。

第五に、ギアツの議論が市場的交換をめぐる交渉に対象を絞り、その顧客化機能を考察したのに対して、我々のモデルでは労働の市場的交換(<雇>)と贈与(<相夥>)を対立するものではなく、連続する決済方法の両端としてとらえ、その<関係>機能を論じている。これは楊家溝の人々がこの両者を排他的なものとして処理しておらず、これらを戦略的に混合し、意思決定を行なうことを反映している。すなわち、贈与と交換を対立的にとらえ、前者を共同体的伝統的なもの、後者を市場的近代的なもの、とみる立場は、少なくとも中国社会を理解する上では適当ではない。この両者の積極的な接合が、我々のモデルがギアツと異なっている重要な点である。

#### 4.2 閭の贈与論

閭(Yan 1996)は黒龍江省の農村の贈与について詳細なフィールドワークを行ない、それが<関係>を基礎として実行され、しかも<関係>を再生産する機能を持つ事を明らかにした。この<関係>は人々相互の<人情>を駆動力として再生産されるもので、中国農村社会を構成する基本的な人的紐帯である。農村においては<関係>が、農業生産活動や相互扶助を実現する上で不可欠な役割を担っているのである。

閻は、Yang (1994) に代表される既存の〈関係〉の研究が、都市という場  
面を舞台としていたことを鋭く批判した。都市においては生産活動が〈単位  
dānwèi〉や〈公司 gōngsī〉といった制度化された組織によって統禦されてお  
り、この場面における〈関係〉ネットワークの駆動は「不正」として認識され  
ることになる。こうして不当にも〈関係〉概念に負のイメージが与えられるこ  
とになった。それゆえ中国社会における〈関係〉の意味を理解するためには、  
農村を現場とすることが不可避であると主張した<sup>(4)</sup>。

この指摘は我々の認識と一致する。特に陝北の村においては、人々の〈関  
係〉が日常のこまごまとした労働から〈窑洞〉建築にいたる幅広い範囲の労働  
提供と結びついて再生産されている。

閻がフィールドとする黒龍江省の村と陝西省北部の村との違いは前者が〈礼  
物 lǐwù〉の交換に強く依存しているのに対して、後者では〈相夥〉が相当の  
比重を持っている点である。この違いは後者の一人当たり現金所得が遥かに低  
いことに強く依存していると考えられるが、それと同時に、〈窑洞〉建築のた  
めに大量の労働を調達する必要がある、これが種々の労働場面における〈相  
夥〉の慣習を支える一つ契機となっているものと考えられる。

また閻は黒龍江省の農村において、〈礼物〉は受け取る側が権威を獲得す  
るのであり、人々が冠婚葬祭の際に贈与を行なうのは、これによって〈関係〉を  
構築・維持し、この〈関係〉によって自分が冠婚葬祭を主催する際に贈与を受  
けるためであるとした。

閻は農業労働や相互扶助という側面で〈関係〉が重要な役割を果たすことを  
強調するが、具体的な事例は大躍進による飢餓の際の相互扶助を挙げるにとど  
まっている。また日常生活における関係性の発揮の具体例も贈与の側面に限ら  
れており、労働の場面についてはほとんど言及していない。

このように閻の分析が「贈り物」のやりとりと、それによる政治的優位や利  
益の獲得といった事柄を主たる分析対象としていることは、閻のアプローチに



偏りがあることを示すよりむしろ、東北農村社会という閭のフィールドの性質を反映している可能性が高い。閭の記述から見る限り、この地域の農村は陝北に比べて都市的な関係性のあり方がより濃厚に作用しているからである。黒龍江省の農村に比べて、陝北の村では具体的な労働の場面で〈関係〉が作用している過程をより明瞭に見ることができる。

閭はまた、〈礼物〉を贈与することによっては自分の権威を高めることができないため、贈与あるいは〈関係〉を通じた階層の形成は見られないと主張し、一方で、「幹部／一般村民」、「都市民／農民」といった外部から与えられる政治的階層性がある場合には、〈礼物〉が上位の者に一方的に流れる傾向のあることを示した。

陝北の村においてもより政治的・経済的地位の高いものに賄賂などの形で〈礼物〉が流れる現象は見られる。また、婚資などのように、より貧しい地域からより豊かな地域へと財が流れるというケースも少なからず存在する。しかしながら陝北農村においては、本稿で主として論じた労働提供の側面を見る限り、その流れに明瞭な方向性は、少なくとも改革開放以後においては見られない。

#### 4.3 羅紅光の〈相夥〉解釈の検討

羅紅光は、我々と同じ陝西省米脂県楊家溝村についての著作のなかで現金を介さない労働交換の存在とその重要性を指摘している（羅 2000）。しかし羅の見方は我々とはいくつかの点で大きく異なっている。

羅はこの村を明確な〈文化核心〉をもったひとつの〈社会空間〉と見なし、各人の空間内の地位が（1）〈社会貢献〉、（2）〈生活智恵〉、（3）〈伝統知識〉、（4）〈為人処事的能力〉などといった〈無形財富〉あるいは〈文化資本〉によって決定されると考えている。この地位の違いによって村の人々は

<文化貴族>、<代表大衆勢力的中間層>、<老弱病残物及“黒皮”(悪魔)>という階層に分類される。村のなかの物資や労働の交換は往々にして不等価交換であり、高い地位にある者に向かって富が流れて行く(羅 2000, 187-206頁)。

しかし強大な地主勢力であった馬氏が革命によって排除され、合作社や人民公社を経て、その生産手段が農民達の間で分配されて形成された現在のこの村に、そのような中心を想定することには無理がある。深尾(1998)および深尾他(2000, 第2章)が示したように、経済的・政治的側面のみならず、文化的な装置の側面からも、明瞭な中心を欠いていることがこの村の特徴なのであり、村人は常日頃、むしろその欠如を嘆いている。

しかもこのような<社会空間>を成立させるために、羅はこの村をひとつの閉じた小宇宙として描くことになった。外部との社会関係とは異質な独自の求心性を村が持つことは事実であるが、これを市場関係などから切り離し、小宇宙として取り出してしまうと、事実の重要な部分を視野から外すことになりかねない。たとえば閻(1996)の示したように、共産党権力や都市との関係が農村における<礼物>の流れに決定的な影響を与えるが、羅の手法ではこういった側面が意図的に捨象されることになる。我々が行ったように、市場と<関係>の緊張関係のなかで人々の行動をモデル化することにより、このような求心性と開放性を矛盾なく処理することが可能となるのではないか。

また、羅(2000, 106)は「義務>帮工>夥種>夥喂>換工>变工>雇工>攬工」という大小関係を掲げる。この関係は左へゆくほど<人気 rénqì>が高く、右へゆくほど<銅気 tóngqì>が高くなるとされ、<人気>は人的紐帯の要素、<銅気>は金銭的要素、の意味と解釈される。しかしこの関係式は羅による上記諸概念の理解に誤りがあることを示している。これらは以下の如く全く異なった系列の概念の一部分を抽出して配列したものであり、羅の主張するような大小関係をなすものではない。

まず<義務 yìwù>は主として公的な労働供出についての概念であり、たと

えば村の灌漑工事のために人々に割当てられる無償労働などのことである。それは政治権力からの呼びかけによる場合もあるし、廟会など民間組織の呼びかけに無償で応じて労働を提供する場合もある。要は見返りのない労働の拠出ということである。次に〈幫工 bāngōng〉は本稿で論じている〈相夥〉による労働提供の一形態を指す。また〈夥種 huǒzhǒng〉は農作業について、〈夥喂 huǒwèi〉は〈夥站 huǒzhàn〉などとともに家畜の飼育について形成されるパートナーシップの名称である。〈換工 huàngōng〉と〈便工 biàngōng〉は同じ意味であり、どちらも短期的な労働の相互供給を示す。たとえば今日あなたの畑を耕すから、明日は私の畑を耕してくれ、というように、短期的にはほぼ等価とみなされる労働を交換することを表す。〈雇工 gùgōng〉は本稿でいう〈雇〉のことであり、現金によって労働の報酬が支払われる場合を指す。〈攬工 lǎngōng〉は出稼ぎを主とする長期の労働契約を指す。

このように複数のカテゴリに属する概念を並列し、無理のある大小関係を羅が作り出すに至ったのは何故であろうか。価値が強く作用する中心からその作用が消滅する外縁に向けた傾斜を想定し、その上に何種類かの労働形態を配列することにより村の価値空間を描き出そうとしたのではなかろうか。

このように、〈銅気〉—〈人氣〉という対立は、独自の文化的秩序の支配する小宇宙として村を切り出そうとする過去の人類学に広く見られた視線を反映している。〈銅気〉に代表される市場的關係が〈人氣〉の象徴する共同体的關係に進入する、というあの構図である。しかし既に何度も述べたように、人々の共同性と市場關係は中国農村においては矛盾するものでも対立するものでもない。両者は最初から渾然一体となって村の構造化の要素となっている。この世俗的な村をエキゾチックな文化的小宇宙として解釈する試みは、その出発点において、無理を抱え込むことになっている。

羅がこのような解釈に到達した背景には、「異質」な社会への希求と、「市場」と「共同体」を対立的に捉える慣行が作用しているのではなかろうか。中国の

ように早くから文明化し、農村にまで市場化が深く浸透している社会にこのような視線を持ち込むことは、認識上の歪みを引き起こす可能性がある。羅のモノグラフは、この問題の所在を実例を以って示した点で貴重である。

#### 4.4 交換の等価／不等価

本節では交換の等価／不等価という問題を我々のモデルの観点から考察する。既述の如く我々のモデルは、以下のような時間構造を持っている。

(1) 労働提供とその決済の層はその場限りの短いタイムスケール、

(2) <関係>は長いタイムスケールで変化し、通時性がこの層で確保される。

この枠組のなかで等価性の問題は、交渉の層に属する実際の支払が「相場」にかなっているかどうか、のみで考えざるを得ない。ところが、支払形態が<雇>から<相夥>の方へ移行すると支払金額が減少し、純粹の<相夥>ではゼロとなる。この支払金額の低下はある水準の<関係>に適合する支払形態が双方によって選択された結果であって「相場」に反しているわけではない。<相夥>形態の主たる意義は<関係>への書き込み機能を持っている点にある。それゆえ<相夥>による無償労働の提供を、短いタイムスケールの層に属する概念である「不等価交換」に分類することは無意味である。

ところが、羅はこの<相夥>による無償労働提供を<不等価交換>と認識する。たとえばかつての村の会計で、シャーマンでもあるMを羅は<文化資本>を大量に蓄積した<文化貴族>と呼ぶ。実際、Mは人件費を一元も使うことなく<窑洞>を建築したので、そのために労働した人々から大量の資源が彼に流れ、そこに<不等価交換>が生じたように見える。このような<不等価交換>の流れの集約点を村の階層の中心と見なす羅の観点からすれば、この人物が村の階層構造の中心に座る<文化貴族>に見えてくるのである。

また、羅は<不等価交換>を見た上に、その原因を<文化資本>と<儀礼的

消費>に見るが、この論理では同じ<窑洞>の建築現場で<雇>の人、<相夥>の人、その中間の人が混在して労働する事態を説明することができない。羅の理論に従えば、<儀礼的消費>や<文化資本>は「共同体」全体を覆うマクロな概念であり、ある人物に<文化資本>があるなら、資源が「共同体」の構成員から一律に流れることになるが、これでは資源の流れが<sup>あいたい</sup>相対で決定される事態を説明できない。

これに対し、我々の立場から見ればMは、種々の儀礼的活動や他者への援助、更にそれらの相互促進的作用によって平均より遥かに多数の人と濃密なく関係>を結ぶことに成功した人物、と規定される。<窑洞>建築における彼に対する無償労働の供与は、Mが張り巡らした相対の<関係>の下で、それぞれの人がそれぞれに<相夥>での労働が相応しいと判断してなされたものと解釈される。個々人の労働提供に対する支払形態の決定を見る限りでは、<関係>のメモリへの書き込みを強引に「対価」と見なすなら、<相夥>は「等価交換」である。おそらく、Mの<窑洞>のために働いた農民に、これは「不等価交換」か、と聞いても<不 bù>と答えたであろう。

尚、純粹の<相夥>は、一方的な労働の提供だが、それは<関係>のメモリへの書き込みを実行したことで決済が完了している。これについて別の時点における逆方向の<相夥>を組み合わせる「等価交換」かどうかを議論するのはここでは無意味である。それはまるで、ある時点における<雇>による現金決済を、別の時点の<雇>と組み合わせる「等価かどうか」議論するようなものである。両時点の相場が違っていても、それを不等価交換ということはできない。

この点を明瞭にする興味深い事実がある。人物Aが人物Bから<相夥>によって労働提供を受けたあと、Bが労働力を必要とした場合にAがそれを提供しなかったとしたどうなるのか、という我々の質問に対して村人は、それはAが<不好意思 bùhǎoyìsi>（気まずい）である、と答えた。<関係>の密接な人

が労働を必要としており、本来なら助けに行かなければならないのに、実行し得ていないことが、〈不好意思〉なのである。つまり、過去の経緯によって形成されている両者間の〈関係〉から判断して、当然果たすべき役割を果たさないでいることが、〈不好意思〉の意味である。

念のため付言すれば、これは以前に受けた「贈与」によって生じた「負い目」を解消できていない、という意味ではない。というのも、このような〈不好意思〉な事態が生じたとしても、〈関係〉がこの出来事で揺らがない限り、決定的な問題は生じないからである。〈墓洞〉建築、結婚式・葬式といった人生に数少ない儀礼の場合、密接な〈関係〉にある者はできる限り労働・金銭を提供しようとするが、それは、こうした儀礼が数少ないメモリーへの書き込みの重要な機会であり、また儀礼の場合には〈関係〉が可視化される作用があるからであって、等価物の返済によって「負い目」を解消するためではない。〈相夥〉による労働提供は〈関係〉のレベルへの書き込み操作によって処理が終了している以上、短時間レベルの概念である「等価性」は問題とはならない。

ところが、この人物Aと人物Bの〈関係〉が何かの理由で悪化したり、途切れることになると、事態は一変する。この場合にはAはBから受けたに等しい労働を提供する必要に迫られる。もし自分で行くのが嫌なら、誰かに頼むなり、誰かを雇うなりして働きに行ってもらわねばならない。長時間スケールの〈関係〉の記憶機能が壊れてしまった場合には、過去の記憶が短時間スケールの「市場」の世界に読み出され、等価物による決済処理を要求するのである。もしその場で決済が終了しないなら、これを互いが債権債務として記憶しておいて将来のいずれかの時点で精算することになる。この事例は〈関係〉の蓄積が行われる空間と、債権が蓄積される市場の空間が異なる次元にあることを示している。「等価」「不等価」というカテゴリは当然のことながら後者にのみ属する。

ただしメモリーへの書き込み機能を無視し、ある二人のやりとりの場面で発生

## 中国陝西省北部農村の人間関係形成機構

する財やサービスの流れのみを通時的に合計していった場合に、長期的にどちらかに偏った流れを観測することは可能である。この場合、この不等価性を社会構造の反映と読むことは不可能ではない。実際、既に見たように閻（1996）は村にとって外的な力が作用する場面では、贈与が上位の者に一方的に流れることを明らかにしている。この村にも外部から与えられた政治権力や決定権、情報的優位等を持つ人物に対し、不均等に財やサービスが流れることは存在する。

しかしそれは、羅がとりあげるMのような人物に対してではなく、村人に忌み嫌われながらも長く村長の座に居座った別の人物Wに対してであり、それは先にも述べた<関係>の別な分析の対象となるべき問題である。そこでの財の不均等な流れは、むしろ村の外部とのつながりに、その原因が求められるのであって、羅の描くように、村という閉ざされた共同体宇宙の中で、徳を積むように文化資本を蓄積した人に対して財やサービスが不均等に流れるというモデル、ないしは一定の人物が超人的な徳を獲得することにより、無条件に共同体の構成員のサービスの提供を受ける、といったモデルによって説明が得られるものではない。

これは中国農村の開放性とその分析視角をめぐって、戦前から繰り広げられてきた議論とも関わる重要な問題であるので、次にこの問題を論じる。

### 4.5 中国農村共同体論の再検討

旗田巍は1966年に発表された論考のなかで、中国農村の共同体について平野義太郎と戒能通孝の間で大戦中に行なわれた論争を回顧した（旗田 1973, 第四章）。両者は同じ華北農村慣行調査のデータに依拠しながら、全く異なった中国農村観を提出した。平野は農村における共同組織である<会>が廟を中心として形成されており、これが自然集落を反映し、原基的な共同体となってい

ると考えた。これに対して戒能は中国の村と日本の村を比較し、前者には境界がなく、組仲間としての団結を欠いていると指摘し、家族の同居すら「一つの下宿屋、アパートに過ぎない」とした。

旗田によれば、平野は中国農村における集団的あるいは協力的関係を重視し、その発見に全力を挙げた。これによって農民生活の協力的側面についての多くの事実が明らかになり、それが大きな意味をもつことが示された。しかし平野には、農民間に何らかの協力や相互扶助活動があった場合にはそれをただちに「共同体」の存在する証拠と認識する傾向があった。このため、平野は中国農村の共同機構の内部構造がどのようになっているかについて、精密な分析を行うことはなかった。また、戒能の主張について旗田は、中国の村がばらばらの個人が集まり、単なる実力がものをいう支配団体に過ぎない、という側面のあることを肯定する。しかし戒能もまた中国村落の共同体的性格を否定しただけでそれ以上の追求をやめてしまった、と指摘する。

そこで旗田は、〈搭套 dātào〉のような農家間の非組織的な互助的關係と、〈看青 kànqīng〉（作物の見張り）などに見られる村全体のレベルで組織化された共同性を明確に区別し、後者の歴史的発展過程に注目した。この観点からの研究により旗田は清末以来の社会変動、特に日中戦争の勃発にともなう農村の窮乏化によって、「村」という枠組が明確化したと指摘した。（旗田 1973, 第6章）。

これに対し内山雅生は、個別的共同性と組織的共同性の峻別を疑問視する（内山 2003, 92頁）。内山の論拠は、1950年代の農業の集団化に際して〈搭套〉が〈互助組 hùzhùzǔ〉の基礎となり、それが〈合作社 hézuòshè〉や〈人民公社 rénmingōngshè〉に発展したという点にある（内山 2003, 第4章）。

個々人が取り結ぶ協同關係が、組織化された共同性の基礎になりうる、という内山の指摘はある意味で当然である。しかし、両者のレベルの違いを峻別する旗田の視点にも根拠がある。問題は、マイクロレベルの個別的關係からマクロ



レベルの構造が、どのように組織化されるか、である。ギアツのスークのイメージ、すなわちマイクロレベルにおける個別的な常連関係の「渦」が、マクロ的なスークという構造を形成しているというイメージを借用し、中国農村に適用するという本稿の試みは、両者の議論を統一するための理論的作業の第一歩という意味もある。

#### 4.6 村を越えた水準での〈関係〉の構造化

次にマイクロレベルでの〈関係〉の形成機構がより大きな構造物を作り出す場合について考察する。ただし現段階では試論の域を出ないことをお断りしておく。

我々のフィールドである陝西省北部は廟の活動が盛んであり、どの村にも複数の廟が存在し、各地の〈廟会〉が公権力とは一定の距離をおいて活発な活動を展開している。これはたとえば東北地区などでは見られない現象である〔深尾・安富 2004〕。廟に対して人々は様々の願いを訴え、その願いがかなえられた場合にどのようなお礼をするかを神との間で契約する。評判の高い廟には多数の人が願を掛けに訪れ、その結果、多額のお布施や奉仕労働が集まることになる。

それぞれの廟にはそれを運営するボランティア団体である〈廟会〉があり、廟に集まる資源を利用して多種多様な活動を行っている。大規模な〈廟会〉は学校や養老院を運営したり、本格的な水利や植林を行なうものもある。これら〈廟会〉の〈会長〉の振舞いに人々は強い関心を持っており、彼らの行為や評判は噂話の格好の話題となる。彼らは人々の評価を常に意識しており、金銭関係の透明性の維持などに気を使っている。

また、廟の改修などに必要な労働は周辺の人々の奉仕労働に主として依存しているが、注目すべきは人々がそれを神に対する〈相夥〉だと認識している点

である。つまり、神に対して労働を提供することで、神との〈関係〉を形成しようとしているわけである。この意味で廟の神は多数の〈関係〉の結節点に位置していることになる。そしてこの場合、物資や労働は人々から神に一方的に流れ、その代わりに「御加護」という現実にはない「サービス」が逆方向に流れる。ここで注意すべきは、廟に見られる神と人々との〈関係〉が、一対多で結ばれているのではなく、あくまで個々の人と神との<sup>あいたい</sup>相対で〈相夥〉を通じて形成されている点である。

一方、〈廟会〉の中心に立つ〈会長〉たちは廟とそれに付随する慈善活動が無償でおこなっている。廟に集まった物資や労働力といった資源は、彼らの活動によって周辺の人々に還元されることになる。この場合、物資やサービスは〈廟会〉の〈会長〉たちから周辺の人々に向かうことになる。それと逆方向に流れるのは人々から〈会長〉たちへの評価と信頼である。こうした信頼のベクトルが集中している状態はたとえば〈威望高 wēiwànggāo〉と評される。

廟の神と〈会長〉はともに多数の人々と〈関係〉を維持し、その結節点となっている。そして、神を中心として人々とのあいだに形成される資源と加護の流れと、〈会長〉を中心とする資源と〈威望〉の流れは、ちょうど表裏一体の関係になっている。こうして個々バラバラでは小さくまとまりのない人々の能力や資源が廟を支点として統合され、大きな力として社会に還元されることになる。

1980～90年代に急成長した鎮川鎮黒龍潭の指導者である王克華はこのような〈威望〉を得た人物の典型であるが、彼自身が無神論者であり、廟という機構を用いて社会変革を実現しようという意図を当初から持っていた点は注目に値する（深尾 1993; 1996）。また、この地域で数十年以上にわたって植林活動を展開してきた朱序弼は、廟で植えた木が決して伐られないことに注目し、彼自身もまた無神論者であるにも関わらず、長年にわたって廟と協力して植林活動を続けている。彼はこの活動からほとんど所得を得ておらず、そうすることで

人々から尊敬を集め、高い＜威望＞を確保している。彼の活動は人々の意識を変革し、この地域の緑化に貢献している。

彼らはそれぞれに傑出した人物であり、高い起業心と克己心を資質として持っているであろうが、それだけではなく、自分の周囲に巡らされた＜関係＞の渦巻のなかに彼ら自身が飲み込まれ、人々が理想的と考える行動様式を内面化するような力を受けていたものと考えられる。また、そのように行動することが人々の更なる信頼を醸成し、自らの＜威望＞を高め、彼らの人生を豊かにしてゆくことを確信できたのであろう。こういった人物を生み出すこの地域の社会風土の背景に、本稿で論じた個人レベルでの＜相夥＞の機構があるものと我々は考えている。飛躍を恐れずにいうなら、1920～40年代に陝北が数々の革命家を排出して革命の「聖地」となったプロセスも、この地域のこうした社会的システムとの関連から考察にする必要があろう。

#### 4.7 コミュニケーション・パターンの含意

最後にまとめにかえて本稿で提示した中国農村のコミュニケーションのモデルが持つ社会的含意を考察する。

このモデルの立場では、中国農村の人々は＜関係＞の濃淡を相互に認識し、それに適当な変換を加えて貨幣的／非貨幣的な方法で種々のやりとりを行ない、その変換が作動する共通の基盤を「罇」によって作り上げている。このやりとりを通じて再生産される＜関係＞が、相互作用のなかで一定の秩序をつくりあげる形で地域社会が構築されるものと予想される。

このようなタイプの地域社会は、貨幣的交換／非貨幣的交換という二律背反的な対立を最初から持っていない点が注目に値する。人々は＜関係＞のレベルと相互関係のある＜相夥＞を選ぶか、それとも市場原理の内部にある単純明快な＜雇＞を選ぶかを常に戦略的に判断しており、両者を混合した中間的な支払

いも可能である。それゆえ市場的要素がこの社会の中で卓越してきたとしても、相互の紐帯が単純に解体するという方向には進まない。人々は現金の流通水準や将来の自分の生活の安定性を考慮にいれつつ、社会的紐帯に依存した相互扶助システムと市場システムを柔軟に使い分けて対応する。

我々が主として調査している地域には出稼ぎで繁栄している村がある。この村は元来この地域で最も貧しい村であり、それゆえ改革開放以降いち早く出稼ぎに出るようになった。この村の中でも特に貧しい人々が最も早く出稼ぎに出たため、このグループのなかから〈包工頭〉と呼ばれる出稼ぎの手配師が生まれた。

有力な二家の〈包工頭〉のうち一方はほぼ全員が村を出て大都会に移り住んでいる。ところがもう一方の家族は相当数が村に居住しており、外で仕事をしているメンバーも頻繁に村に戻って社会的役割を積極的に果たしている。後者の〈包工頭〉を中心とすることで、この村は皆が出稼ぎに出るようになってから社会的紐帯を強化しており、たとえばそれはこの村の廟の建物が年々立派になっており、その〈廟会〉(この場合は廟の祭の意味)が年々盛大になっていることが象徴している。

これに対して、「共同体」の成員であるかどうかで、助け合いや義務的労働が行われるかどうかが一律に決定されるタイプの社会を考えてみよう。この場合、個人間の〈関係〉の濃淡によってやりとりの支払形態が微妙に操作される、という要素は薄くなる。その結果、共同体のウチは非貨幣的交換、ソトは貨幣的交換が支配するという構図が形成される。このタイプの共同体の内部に貨幣的交換が侵入してくると、共同体が「崩壊」するという事態が予想される。

中国のように高度に市場性と共同性が結びつき、使い分けられるという社会を前提とした交換理論の構築は相対的に立ち遅れていると言わざるを得ない。この中で注目すべきは、黒田明伸の近年の研究である。

黒田(2003, 第6章)は、伝統中国と絶対王政期以前の西欧の市場町の貨幣

のあり方を比較し、両者が対照的な性格を持つことを明らかにした。伝統中国の市場町は、経済的意思決定を独立に行う多数の小農を基盤に形成され、市場圏内部で流通する現地通貨を自律的に設定し、個々ばらばらの小農・商人たちが地域空間を共有する「支払共同体」というゆるい制度的枠組みを形成する。一方、絶対王政期以前の西欧も市場町を軸とした共同体を持っていたが、そこでは個人間の相対の信用取引を頻繁に行うことで地域流動性を確保し、債務者に債務を履行させるため、法廷を中心とする法共同体が形成されていた。この法共同体は、強固な共同性とメンバーシップを持つものであり、その構成員間の紐帯の強さは支払共同体とは比較にならない。後者のような形態の市場経済から国民経済・資本主義経済が生成したのであり、前者のような形態をとる市場経済はそのようなパスをとらなかった。

黒田は伝統中国に見られる秩序が、どのような歴史的経緯のなかから形成され、再生産されたかを明らかにしたが、その基底となる小農の行動様式そのものを詳細に論じてはいない。貨幣交換のルールが隅々にまで浸透し、なおかつ貨幣が不足する中国農村の基層において、戦略的に構築されている市場と〈関係〉の切り替え機構の解明は、中国のネットワーク構造を理解する上の核心となる。本稿で提示したモデルは、このような理解に到達するための出発点になりうるものとする。

更に、ギアツがモロッコのスークの多様性について指摘した論点に触れておきたい。スークには、様々の出身地・文化・習慣・宗教・職業を持つ多様な人々が多様な行為を通じて関与している。この多様性は個々人に共通のルールが強制されていないことによって達成されている。そのかわり、それぞれの市場参加者は自分用のインターフェイスを構築することで市場に接続する。こうして構築されたインターフェイスの連結体としてスークが成立しているため、この多様性が道理に叶った形で編成され、安定的な形をとっている、とギアツは主張する。

ある集団の成員に属しているか否かを厳密に峻別し、ウチのメンバーに対して種々の細目の共有を迫るタイプの機構は成員の行動様式の多様性を抑制する方向の力を持つ。一方でスークのようなタイプの機構であれば、各人は自分の周囲に適切な常連関係さえ構築できれば機構の運動に参加することができる。このように自前のインターフェイスの構築を許すことで、多種多様な人々の行為を要素として取り込むことが可能となっている。同じ論理を用いることで、中国農村がなぜ開放性を維持しながらある種の共同性を確保しうるかを説明することができる。この機構もまた現代の我々が直面する社会的安定性と多様性の両立という問題に示唆を与えるものと言うことができる。

また先進諸国では、貨幣的あるいは市場的関係の圧力が生活面に浸透し、共同体的側面をどのように再生するかという問題に直面している。このなかで、ボランティアやエコマネーなどがこのような問題への解決策として導入されようとしている。黒田（2003, 218頁）はイサカ・マネーなどのいわゆる「地域通貨」に言及し、これが住民間の相互信用供与に依存する西欧型の機構に属することを指摘する。これと全く異なった論理で成立する伝統中国の「現地通貨」の存在は、地域内部で流通し、地域の物質循環を促進する機構が、「地域通貨」とは別の方法で成立する可能性を示している。黄土高原の農村に見られるような、市場性と共同性を戦略的に使い分ける農民の姿には、このような問題に取り組むための重要な鍵が隠されている。

\* \* \*

本稿ではこれまでの中国農村研究では、十分に明らかにされることのなかった、農民の経済合理的な行動と、関係的互酬的な行動のスイッチングのシステムに注目することにより、両者が分かちがたく結び合いながらも、一定の合意とルールを伴いつつ社会の網の目を作り上げてゆく機構を明らかにすることを試みた。今後こうした分析をすすめることにより、「村」あるいはそれを超える社会空間内にどのような構造が形成され、それがどのような運動特性を持つ

のかという問題を実証的に明らかにしてゆきたい。

- 1 黄土高原に特有の住居。この地域の〈窑洞〉は掘り崩した斜面に寄りかかるようにアーチ状の建築物を構築したもので、黄土と石とファサードに使われる木柱と麻紙などで作られている。〈窑洞〉は通常、いくつかの部屋が横に並んだ形で作られる。内部を通路でつないだものもあるが、構造上は独立した小部屋の連なりである。
- 2 通常〈窑洞〉はアーチ構造の部屋が三つから四つ（三連か四連）で構成される。七連の〈窑洞〉は相当に大規模である。
- 3 〈廟 miào〉は中国農村で普遍的に見られる宗教活動の場である。通常、〈寺 sì〉が仏教系であるのに対して、廟は道教の神々をまつる場とされるが、まつられる神々は地域によってまちまちでローカルな地域神も多い。通常、廟のまつる神の誕生日などに廟の祭りが行われ、芝居の奉納が行われたり、物資の交易会が併設されたりする。北方中国農村では、きわめて広く分布し、盛んに行われる。
- 4 山東省における調査をもとに、閩と同様北方農村における〈関係〉の構築のメカニズムについての研究に Kipnis (1997) がある。同著も人々が〈礼物〉と食事などのやりとりを通じて、〈人情〉と〈関係〉の構築を行うプロセスを明らかにしているが、その考察は主として互酬的〈関係〉構築を文化として分析する視点によるものである。

## 文献目録

Carrier, James G. 1992, "Occidentalism: The world Turned Upside-Down.", *American Ethnology* 19(2): 195-212.

Geertz, C. 1979, "Suq: The Bazaar Economy in Sefrou", in Geertz, C., Geertz, H. and Rosen, L., *Meaning and Order in Moroccan Society: Three Essays in Cultural Analysis*, pp.123-264, New York, Cambridge University Press.

Kipnis, Andrew B. 1997, *Producing Guanxi: Sentiment, Self, and Subculture in a North China Village*, Durham and London, Duke University Press.

Yang Mayfair Mei-hui 1994, *Gifts, Favors, and Banquets: the Art of Social Relationships in China*, Ithac & London, Cornell University Press.

Yan Yunxiang 1996, *The flow of Gifts*, Stanford, California, USA, Stanford University Press.

羅紅光 2000, 『不等价交換：圍繞財富的勞働与消費』, 浙江人民出版社, 杭州, 中国。

黒田明伸 2003, 『貨幣システムの世界史』, 岩波書店。

旗田巍 1973, 『中国村落と共同体理論』, 岩波書店。

深尾葉子 1993, 「黄土高原の景観と人々」『現代思想』20巻9号, 青土社。

深尾葉子 1996, 「地域と呼吸する中国 NGO」『世界』629巻12号, 岩波書店。

深尾葉子 1998, 「陝北農村における雨乞いを通じた社会的実践——黄土高原農村における環境と歴史的な文脈」『現代中国研究』中国現代史研究会2号, 32-53頁。

深尾葉子 1998, 「中国西北部黄土高原における廟会をめぐる社会交換と自律的凝集」, 『国立民族学博物館研究報告』23巻2号。

深尾葉子・井口淳子・栗原伸治 2000, 『黄土高原の村から——音・空間・社会——』, 古今書院。

深尾葉子 2003, 「黄土高原の空間的特徴とそこに構築されるコミュニケーション」, 妹尾達彦『中国黄土地帯の生態環境と歴史』刀水書房, 2003年出版予定。

深尾葉子・安富歩 2004, 「満洲の廟会」, 『アジア経済』投稿中。

※なお、本文中の中国語ないし現地のタームについては<>で示し、煩雑になるものを除いて初出にピンインを附した。